

知的障害特別支援学校高等部における作業学習の授業改善に関する研究（要旨）

—生徒の主体性と障害の状態や特性を踏まえた指導—

発達臨床支援高度化コース 17AD106 柳澤 真美

【指導教員】 名越斉子 櫻井康博 尾崎啓子
【キーワード】 知的障害特別支援学校 作業学習 授業改善 課題分析

1. 問題の所在

知的障害者の離職を減らすためには、特別支援学校における職業教育、作業学習の授業の在り方を改善する必要があると考えた。作業学習の学習題材は多様化しており、教員が、題材の専門知識を持つことや、生徒主体の指導支援を行うことは困難な状況にある。生徒の主体的に働く意欲を育み、生徒一人一人に応じた指導支援を行うために、作業学習の題材や指導支援を検討する方法を必要としている。

作業学習の改善や就労支援では、「課題分析」の個への配慮と指導についての有効性が示されている。特別支援学校においても様々な場面で課題分析が用いられているが、課題分析の持つ有効性を活かしてきれていない状況にある。

教員が、課題分析を用いて、教材研究や指導の検討を行うことで、作業学習の指導に関する課題を解決できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、「教員が課題分析の手法を用いることで、生徒の障害の状態や特性等に配慮した作業学習の指導や支援を行うことができる」と仮説し、検証した。

この検証から、生徒の主体性と障害の状態や特性等を踏まえた作業学習の指導の在り方を示すことを目的とした。

3. 研究Ⅰの方法と結果

作業学習や就労に関わる学習、就業支援についての現状と課題、授業改善についての情報収集と考察を行い、課題分析を用いた教材や指導法の検討の持ち方について示唆を得た。児童生徒が行動上の困難を起す要因を、活動や指導の側面から分析する方法について検討し、結果、作業活動の手順分析と機能分析を行い、つまずきの要因を検討する方法（例：図1）を研究Ⅱで試行することとした。

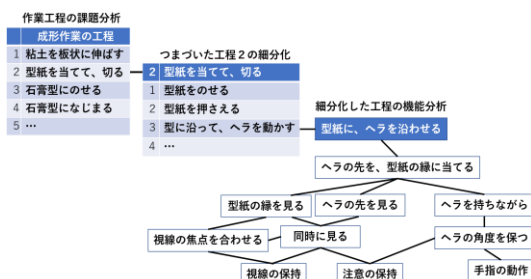


図1 例：窯芸「成形作業」の課題分析と機能分析

4. 研究Ⅱの方法と結果

特別支援学校高等部の作業学習の担当教員4名と生徒2名を対象とし、対象教員が行う課題分析を用いた検討及び指導と、対象教員に対する質問紙調査の回答の変容から、仮

説を検証した。

検討及び指導の場面では、対象教員が、対象生徒のつまずきや困難の要因を特定し、その困難や特性を踏まえた支援の方法を検討し、指導支援を実施したことで、4つの指導場面の内、3つの場面で生徒の技能の向上が見られた。質問紙調査では、「自分の理解しやすい方略を知り、提供することを要求するよう支援をする。」「自分で計画や方略を立てたり、自分で扱いやすいように工夫したりすることを支援する。」という項目の重視の度合いが高まった。また、記述により回答された支援内容は、支援の種類が増えたり、具体性が高まったり、生徒主体になるなどの変容が見られた。

5. 考察

課題分析を用いて検討された指導や支援の方法は、生徒が取り組む作業活動の困難を軽減し、そして作業学習での支援のみでなく他場面への汎化が期待できた。これは、「生徒の障害の状態や特性等に配慮した作業学習の指導や支援を行うことができる」という仮説が支持されたとと言える。

また、教員が、生徒に作業活動への取り組みに対しての自己評価を促し、教員の支援に対するフィードバックを求め、指導と支援を変化させたことなどは、「生徒の主体性を踏まえた指導」を行うことができたことと考察できた。

しかし、生徒の困難の要因を特定しても、どのような支援が困難に応じた支援方法であるかを検討することに難しさがあったこと、対象が少数であったことは課題であり、今後、対象以外の生徒や他の作業活動での検討を進め、作業学習の授業改善の方策を検討していきたい。

6. 作業学習の改善の方向性

教員は、課題分析を用いて指導や支援方法を検討することで、学習題材や教員自身の指導や支援方法が持つ「障壁」を捉えることができ、生徒に応じて方法を変化させたり、行わなかったりすることにより、生徒のつまずきや困難の要因である「障壁」を取り除くことができる。

学びのユニバーサルデザイン：UDL（CAST, 2011）では、全ての学習者に最適な一つの提示、行動や表出、取り組みの方法というものはなく、原則として、多様な方法の提供を求めている。作業学習における提示（理解）と行動や表出、取り組み方についてのオプション（複数の多様な方法）を用意するためにも、一人の生徒に適した方法を探るためにも「課題分析を用いた検討」は有効であり、学習題材に対する高度な専門性や経験値を要せず、生徒の障害の状態や特性を踏まえて、主体的な作業活動を支援することができるようになる可能性がある。